



大人の発達障害ってそういうことだったのか その後

宮岡 等, 内山登紀夫 著

●A5 頁330 2018年7月

定価: 本体3,000円+税

[ISBN978-4-260-03616-0]医学書院刊

読んで多くの項目にいちいちそうだそうだとうなずくことが多く、一気に最後まで読み進むことができた。大人の発達障害は今や精神科の臨床のなかで常に意識をせざるを得ない事項であり、どうやってこの概念なしにわれわれが二十世紀には臨床をやっていたのかわからないほど今やわれわれの臨床に溶け込んでいる。先日日本精神神経学会でも本書は売上一位を連日続けていた。いくつか激しく點頭したい項目を抜き書きしてみた。

まずは、診断だけを告知して送りつけてくるのはやめて欲しいという件だろうか。そもそも発達障害というのは、統合失調症やうつ病、いわんやてんかんなどとは診断の意味が異なっていて、同じ診断という名前を冠にしているとしてもその実態は大きく違う。例えばわれわれ誰もが自閉症スペクトラムの傾向性はあって、違うのはそれが1なのか5なのか9なのかという程度の問題であり、その傾向性を念頭に置いて診療をすると、なかには随分治療的介入のフォーカスを絞ることができる人がいる。したがって、自閉症スペクトラムという特性を念頭に置いて、それをいかに臨床のなかに組み入れていくのか、あるいはいかにないのかは、来院して来られる家族・本人とのやり取りのなかで個別に、オーダーメイドで一人ひとり考えなければならず、そこには診断をどのように告知し、どのように治療に組み込むか、あるいは事例化して医療が引き受けるかどうかまでの幅広い選択肢がある。あらかじめ、本当かどうかともわからない自閉症スペクトラムの診断を付けられての来院ということになると、こうした枠組み作りの大きな妨げになるのは間違いない。大人の発達障害のための専門施設を対外的に喧伝し膨大な公的予算を消費しているような場合は別であるが、診断をした

医師が治療も行う、治療を行わないなら診断はしないというのは、確かに意識化しておいてよい重要な指摘だと大いに得心するところがあった。

次に挙げるとしたら、発達障害を診断名として使わないことであろうか。自閉症スペクトラム自体が非常に幅広くかなりヘテロな傾向性の集合体であるが、注意欠如・多動性障害はそれとは独立した傾向性であり、さらにいえば発達性協調運動障害とか、読字困難を始めとする学習障害など、脳機能の数だけ発達障害も種類があるのは間違いない。これを全部一くりにして取り扱うのは当然乱暴この上ない話であり、少なくとも診断という名には値しないことは著者らの言う通りであろう。発達障害といえば自閉症スペクトラムのことを指すことが多いが、花は桜といった用語法であり、医学的な診断名にはなじまない。

いずれにせよ本書を通して強く感じられるのは、診断ということの意味を発達障害ほど私たちに突き付ける状況は他にはないということである。最近では「発達障害かどうかを判定して欲しい」という主訴で来院される方が少なからずある。本来は主訴があり、主訴をどう治療するかということを考えるための手段として診断はあるはずなのだが、AQとか知能テストなど目に見えるもので診断の白黒が付かないと納得できない方もいる。自閉症スペクトラムの診断は、あくまでも人生をよりよく過ごす手助けをするためのツールであることを考えれば、診断で終わりではなく、診断してそれからどうするのが問題となるはずだが、現状ではしばしば診断それ自体が社会的・心理的に大きな影響を与えてしまう。著者らの言うように大人の発達障害は、精神科医に突き付けられた大きな試練であることは間違いない。